様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年３月３１日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：２００８～２０１２
課題番号：２０４０１０１１

研究課題名（和文）　亜熱帯地域における多民族の生業経済と定期市―海南島と雲南省を事例として―

研究課題名（英文）　The Multiethnic Livelihood Economy and Regular Markets in the Subtropical Regions -Cases in Hainan Island and Yunnan Province, China-

研究代表者
西谷　大（Nishitani Masaru）
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：50218161

研究成果の概要（和文）：

伝統的な技術でおこなわれてきた農耕は、ある特定の生業に特化するのではなく、農耕、漁撈、狩猟、採集といった生業を複合的におこなうことに特徴があり、これが生態的な環境の多様で持続的な利用につながってきた。本研究では、中国・海南省の五指山地域と、雲南省紅河州金平県者米地域とりあげ、伝統農耕の実践と政府主導による開発、そして自然環境という 3 者を、動的なシステム（いきすぎた開発と環境の復元力）としてとらえ、その関係性の解明を目的とした。対象とする地域の現象は「エスノ・サイエンスによる伝統農耕と環境保全技術」「共同体意識と環境保全」「地域社会の交易とグローバルな市場経済の影響」など、アジア地域の環境問題を考える上で重要な視点を含んでいる。

中国の急速な経済発展は、さまざまな社会的矛盾を生み出すだけなく、激しい環境破壊をもたらした。2006 年から開始した第 11 次 5 カ年計画は、中国政府が推進している「小康社会（生活に多少ゆとりのある社会)」の達成に重要な役割を担うものと位置づけられている。特に経済を持続可能な成長モデルに転換するため循環型に切り替え、生態系の保護、省エネルギー、資源節約､環境にやさしい社会の建設を加速するといった環境政策の大変革をおこなおうとした。しかし昨今の中国の公害問題が意味するように、経済発展が至上目標であるという点はまったく変化がない。中国において地域社会を維持してきた特徴の一つとして市の存在がある。市を介して地域内で各家庭単位での参加と「小商い」が可能な、この市の存在こそが自給的な経済活動を維持してきた。そのことが環境保全や地域社会の生業経済を両立させることに結びついてきたと考えられる。環境保全と生業経済を両立させようとするならば、地域社会の生活と経済に深く結びついた市を維持、または復活させる必要があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：

Indigenous farmers often integrate different types of subsistence such as agriculture, fishing, hunting and gathering; diversified environmental zones are used on the basis of farmers' indigenous knowledge. It is contrasting to farmers in industrialized societies who mostly depend on mono-cropping and are less interested in utilizing surrounding environment.

In the present study, we conducted fieldworks in Wuzhishan region in Hainan Province and in Honghe region in Yunnan Province, China, for investing the relationships among indigenous subsistence, government-led developmental project and natural environment. We tried to evaluate the relationship as a dynamic system; for example, we found that (1) the people could mitigate unfavorable impacts of government-led developmental project by using indigenous knowledge about natural environment; and (2) social organization of communities played a role in environmental conservation.

Rapid economic development in China is usually regarded as a cause of environmental destruction. A national initiative launched in 2006 (the 11th five-year plan) aimed at achieving "moderately affluent" society. The important challenge is to implement sustainable society by ecosystem conservation, efficient resource use, environmentally sound economy and social system. Yet, as symbolized by recent reports of air pollution problems in urban areas, the goals have not been fully accomplished.

One notable finding in our fieldworks is the fundamental role of "market" in maintenance of regional society. Mar ket has enabled households to exchange their surplus production with deficient materials, which contributed to sustainable survival strategies in the region and to avoid over exploitation of natural environment. The problem is that market is nowadays regarded as old-fashioned and not-efficient places for economic activity and thus is underscored by the government people. They should notice invisible function of market in sustainability of regional economy as well as conservation of natural environment, and re-promote it in rural parts of China.

交付決定額　　（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2009 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2010 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2012 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総　計	9,300,000	2,790,000	12,090,000

研究分野：総合人文社会
科研費の分科・細目：地域研究
キーワード：生業経済、環境保全、市場経済、市、交易、小商い

１．研究開始当初の背景

水田や焼畑を開くためには、一次植生を一度切り開く必要がある。そして農耕地周辺の生態的な攪乱によって生まれる二次的自然と人為との中間的な空間は、食用となる野生植物の生育や、あるいは狩猟対象となる野生動物の生育に適しており、人間にとっては周辺的な生業の場を提供することになる。また水田が発達すると、水田やその周囲の水系に生息するドジョウ、フナ、タウナギなどの水田魚類を捕ることで、漁撈を水田に内部化し、それが自給的な食料となってきた。さらには水田の畦畔という人為の加わった攪乱環境で繁殖する水田雑草も副食の野菜として利用されてきた。

このように伝統的な技術でおこなわれてきた農耕は、ある特定の生業に特化するのではなく、農耕、漁撈、狩猟、採集といった生業を複合的におこなうことに特徴があり、これが生態的な環境の多様で持続的な利用につながってきた。中国の急速な経済発展は、さまざまな社会的矛盾を生み出すだけなく、激しい環境破壊をもたらした。それだけでなく、地域社会が維持してきた、伝統的な技術でおこなわれてきた農耕の特徴である、ある特定の生業に特化するのではなく、農耕、漁撈、狩猟、採集といった生業を複合的におこなうという在来知が破壊されつつある。

２．研究の目的

伝統農耕の実践と政府主導による開発、そして自然環境という 3 者を、動的なシステム（いきすぎた開発と環境の復元力）としてとらえ、その関係性の解明を目的とする。対象とする地域の現象は「エスノ・サイエンスによる伝統農耕と環境保全技術」「共同体意識と環境保全」「地域社会の交易とグローバルな市場経済の影響」など、アジア地域の環境問題を考える上で重要な視点を含んでいる。

３．研究の方法

住み込み調査： 海南島・五指山地区および雲南省紅河州金平県者米地域に調査地域を設定した。しかし雲南省においては、少数民族居住地域における微妙な政治的状況および国際河川のダム建設問題にからんで、中国政府が外国人研究者だけでなく中国人研究者に対しても正式な調査許可を発行しない状況が調査期間中続いた。

調査の方法は、村落周辺地域を、「水田ゾーン」「水田周辺ゾーン」「斜面畑ゾーン」「斜面畑周辺ゾーン」「二次林ゾーン」「自然林ゾーン」の 6 つに識別し、それぞれのゾーンにおける環境利用の質的・量的側面を網羅的に記録した。

さらにそれぞれの行動が環境にどのような影響を与えているかについての村人の認識を聞き取った。環境利用の実践、その環境影響に関する認識が、経時的にどう変化してきたか、外部からの開発にどう影響されてきたかについて聞き取り調査を実施した。

リモートセンシング：住み込み調査の後半に、幾何補正のためのグランドコントロールポイント（ランドサットの場合は 15 ポイント）、および「水田ゾーン」「水田周辺ゾーン」「斜面畑ゾーン」「斜面畑周辺ゾーン」「二次

林ゾーン」「自然林ゾーン」という 6 つの土地利用分類地図を衛星データから作成するためのトレーニングデータを収集した。位置情報の収集には、Trimble 社の GPS（汎地球測位システム）を利用した。ラップトップＰＣを調査地に持参することで、土地利用分類地図を現地で作成し、その妥当性の確認と改善を行った。一方で、対象地域の地形図をもとに、デジタルエレベーションモデル（全ての座標について標高データが与えられたデータ）を作成し、水系の抽出、斜度・標高のゾーン別分析などを実施した。

４．研究成果

海南省五指山地域では、リー族と呼ばれる人々が居住し、水田、焼畑、狩猟採集という生業を複合的におこなってきた。しかし 1980 年代以降の国家の開放政策にともなう市場経済のグローバル化によって、伝統的な焼畑や山焼き、それに狩猟が禁止され、換金作物を植えることが奨励された。その結果伝統農耕と自然環境の関係性は劇的に変化した。しかも、海南島のリー族社会において伝統農耕と自然環境との関係性の変化は一様ではない。すなわち（1）保力村では換金作物の導入が進む一方で、森林伐採による木材の販売と出稼ぎが中心で自然環境は劣化しつつある（2）大平村では、近郊農村という特徴を生かし都市部への野菜販売によって現金獲得が盛んでありつつ伝統農耕も維持されている。(3) 水満村は国家保護地区・観光開発区に位置するため、焼畑と狩猟採集が禁止され、水田雑草を集約的に利用する点に特徴がある。(4) 初保村は、交通の不便さによる市場アクセスの悪さから、環境保全的な伝統農耕が最もよく維持されてきた。

そこで海南島五指山地域の生業戦略の歴史的変遷を、生態学的な調査から明らかにしつつ、植生調査を実施しリモートセンシング衛星データの分析によって空間的に把握した。

その結果、棚田、焼畑、狩猟採集といった生業の背景には、共通した自然資源利用の民族的規範が存在することが判明した。第一に個人や村単位が、村境や土地の所有を明確にせず、むしろ曖昧にすることで自然資源を重複しながら利用していた。第二に水田や焼畑といった耕作地でさえも、所有があいまいで放棄すれば誰もが利用可能であった。このことが五指山地域のリー族が自然資源を多様に、しかも持続的な利用を可能にしてきたと考えられる

その規範とは「自分で植えたもの」と「生えてきたもの」によって所有が決定されていたということである。この所有の規範によってリー族は個人単位・村単位で、土地と自然資源を重層的に利用することが可能になったと考えられる。

また水田と焼畑は、灌漑システムの有無や栽培作物とその方法からみると、まったく異なるようにみえるのだが、リー族においてこの両者を維持させてきたシステムの根本は、所有に関する共通した規範だったと考えられる。

一方、雲南省紅河州金平県の者米地域では、9 つのエスニック・グループがそれぞれに特徴のある複合的な生業をおこないながら居住している。すなわち（1）海抜 500m前後の河谷平地に住むタイ族は水田耕作を中心にし、水田雑草や水田漁撈といった生業を複合的におこなってきた。(2) 海抜 800～1300m の山の斜面に居住するアール族やハニ族は、棚田による水田耕作と焼畑を複合的におこなってきた。ヤオ族は水田耕作と焼畑、森林内での換金作物の栽培や狩猟採集を生業

の中心にしてきた。(3) さらに海抜 1300m以上の高地では、移動的な焼畑と狩猟採集を複合的におこなってきたクーツォン族が居住していた。

各エスニック・グループは高度によって棲み分けをおこない山を垂直に利用してきた。自然環境利用の相違と生業の違いは、生産物に差異を生み出してきた。タイ族は水田に特化し、コメと綿布を交易品としてきた。アールー族の棚田は大規模で複雑な灌漑システムをもつが、むしろ畑作に特化し野菜等の生産に重点をおいてきた。またクーツォン族は狩猟による野生動物を特産品としてきた。そしてヤオ族は中国ではすでに非常に希少な、トラ、テナガザルなどが棲むベトナム国境近くの原生的な亜熱帯林の辺縁で藍を栽培しそれを特産品としてきた。

こうした生産物は、河谷平地の町で開かれる６日ごとの定期市を介することで、民族間の交易が日常的におこなわれてきた。つまり者米地域に居住するそれぞれのエスニック・グループは、自然環境の差異を生業戦略に結びつけ特産品を生み出すことで、者米という一つ地域内で生業複合体を形成してきた。そして生業の差異を定期市に結びつけた内発的な生業経済によって、自然環境と人間の生業との調和を生み出し、そのことが自然環境の多様で持続的な利用につながってきたことが明らかになった。つまり地域の内発的な生業経済の発展は、世界規模での急激な市場経済のグローバル化に対して、バッファーになってきたと考えられる。

今回の研究でのもうひとつの発見は、市を介して地域内で各家庭単位での参加と「小商い」が可能な、この市の存在こそが、ある程度の自給的な経済活動を維持してきたことと深く関係していることである。そのことが収奪的な環境利用を抑制させ、環境保全や地域社会の生業経済を両立させることに結びついてきたと考えられる。環境保全と生業経済を両立させようとするならば、地域社会の生活と経済に深く結びついた市を維持、または復活させる必要があると考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１１件）

①Nishitani Masaru　Nathan Badenoch、Why Periodic Markets Are Held: Considering Products,People, and Place in the Yunnan-Vietnam Border Area Southeast Asian Studies、査読有り、2-1、2013、171-192

②Inoue　Yosuke、Umezaki M、Watanabe CHIO Emergence of income inequality and its impact on subjective quality of life in an ethnic minority、community in Hainan Island, China. Anthropological Science、査読有り、120、2012、51-60

③西谷　大、中国雲南省の棚田の灌漑システム、SEED　査読無し、４　2011　8-15

④篠原徹・西谷　大、野生植物と栽培植物の境界と生業との関係性、国立歴史民俗博物館研究報告、国立歴史民俗博物館、査読有り、164、2011、7-34

⑤西谷　大、者米谷の生業複合体からみた市場メカニズムの生起、国立歴史民俗博物館研究報告、国立歴史民俗博物館、査読有り、164、2011、35-62

⑥梅崎昌裕・西谷　大、雲南省者米谷における土地利用パタンの空間情報学分析、国立歴史民俗博物館研究報告、国立歴史民俗博物館、査読有り、164、2011、159-175

⑦西谷　大、海南省初保谷と雲南省者米谷の棚田、『人と水Ⅱ　水と生活』秋道智彌･小松和彦･中村康夫編、査読無し、勉誠出版、2010、269-308

⑧西谷　大、棚田の灌漑システムからみた水利用と環境利用の多様性ー多民族が暮らす雲南国境地帯を事例として、国立歴史民俗博物館研究報告、国立歴史民俗博物館、査読有り、145、2009、63-100

⑨西谷　大、水田と焼畑ー重層の生業戦略からみた複合的な生業、国立歴史民俗博物館研究報告、国立歴史民俗博物館、査読有り、153、2009、　87-115

⑩西谷　大、市がたつ雲海の谷、『季刊民族学』、査読無し、128、2009、3-26

⑪ Umezaki M, and Jiang HW、Changing adaptive strategies of two Li ethnic minority villages in a mountainous region of Hainan Island, China、Southeast Asian Studies、査読有り、47、2009、348-362

〔学会発表〕（計６件）

①西谷　大、从生业和市集分析环境利用ー云南省者米谷事例ー、Biological and Cultural Diversity for Sustainable Mountain Development、2010年6月21日～23日、中国・雲南省・元陽

②西谷　大、海南省初保与云南省者米的生业的特点的比较、国際シンポジウム『中国（海南）黎族文化中日学術研究会』、2009年12月18日、中国海南省五指山市

③西谷　大、The emergence of periodic market and inter-ethnic group diversity of subsistence in Zhemi valley, Yunnan of China、第16回国際人類学民族学会議、2009年7月30日　中国雲南省昆明市

④篠原徹、Ecological anthropology for subsistence, nature, and their relationship: East Asian perspectives、第16回国際人類学民族学会議、2009年7月30日　中国雲南省昆明市

⑤梅崎昌裕、Transformation of subsistence in a mountainous village in Hainan Island of China国際シンポジウム『中国（海南）黎族文化中日学術研究会』、2009年12月18日　中国海南省五指山市

⑥西谷　大、从生业和市集分析环境利用和市场机制的产生-云南省者米谷事例-、明清以来云贵宾高原环境与社会安定、2008 年 8 月 28 日、中華人民共和国・上海市　上海复旦大学

〔図書〕（計１件）

①西谷　大、多民族の住む谷間の民族誌、角川学芸出版、2011、342

６．研究組織

(1)研究代表者

西谷　大（SHITANI MASARU）

国立歴史民俗博物館・研究部・教授

研究者番号：50218161

(2)連携研究者

篠原　徹　（SHINOHARA TORU）

滋賀県立琵琶湖博物館・館長

研究者番号：80068915

安室　知　（YASUMURO SATORU）

神奈川大学・経済学部経済学科・教授

研究者番号：60220159

梅崎　昌裕（UMEZAKI MASAHIRO）

東京大学・医学系研究科研究院・准教授

研究者番号：30292725